

機関番号：32612  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520168  
 研究課題名(和文) 徳川期合巻史再構築のための初代歌川国貞の合巻に関する書誌学・文学的調査と研究  
 研究課題名(英文) Bibliological and Literary Research on the Gokan of Utagawa Kunisada I: Reconstruction of Gokan History in the Tokugawa Period  
 研究代表者  
 津田 眞弓 (TSUDA MAYUMI)  
 慶應義塾大学・経済学部・教授  
 研究者番号：40390588

## 研究成果の概要(和文):

19世紀前半の江戸で、最も発行点数・部数が多かった「草双紙(合巻)」の挿絵の第一人者となった浮世絵師「初代歌川国貞(三代豊国)」の合巻における業績を再考するために、彼が関わった合巻の調査を行なった。これをもとに、合巻における絵と文章の表現方法について明らかにし、単なる挿絵ではないことを指摘した。また国貞らに私家版浮世絵を発注していた大名の文芸活動について報告もし、江戸時代後期の文化形成のあり方を考察した。

## 研究成果の概要(英文):

In order to reconsider the achievement of “Utagawa kunisada (Toyokuni)” who was an artist painter of Ukiyoe to become the leading authority of illustrations for “Kusazoushi (Goukan)” which had the highest number of publicized issues in the early 19th of the Edo period, I studied about Goukan in which he became engaged. Then, I clarified the manner of expression by pictures and writings in Goukan from the results of my study and indicated that those were not the mere illustrations. In addition, I made a report on art activities of feudal lords who frequently ordered Ukiyoe to be printed but not published to Kunisada or other artists and considered the whole concept of culture formation at the end of the Edo period.

## 交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学 草双紙 合巻 初代歌川国貞 三代歌川豊国

## 1. 研究開始当初の背景

草双紙は江戸で出版されていた絵本群で、近世前期から明治初期まで愛玩されていた。挿絵は主として浮世絵師が関わるように、商品としても浮世絵に近い文芸で、18世紀後半に始まるいわゆる黄表紙という様式からは、他のジャンルを圧倒して、最大の発行点数・発行部数を誇っていた。

その草双紙の19世紀からの様式を合巻と言う。草双紙の表現は、絵と文が同一の紙面に混在し等しい重みを持つが、草双紙の最終形態というべき合巻は、当時人気を集めていた読本などの影響を受けて小説として物語性が強くなり、文章量が多く、絵組(レイアウト)も作者が指定していることが多いのため、日本文学の領域で研究されてきた。このことによって、主としてこれまでは作者を軸とした見方がなされてきた。

申請者は、合巻において最長・最多の専門作者で活動期が徳川期合巻の歴史とほぼ重なる山東京山(山東京伝の弟)の研究に従事してきた。このことから、次のステップとして合巻の表現に重要な絵師の側面に注目したいと考え、京山の代表作の一つ『朧月猫草紙』(山東京山作・歌川国芳画)について、作者・絵師の双方から調査した論文を執筆、合巻における絵と文のありようを考察した。

(「歌川国芳画『朧月猫草紙』と猫図」(『浮世絵芸術』135、2006年)、「山東京山作『朧月猫草紙』にみる合巻の本分と戯作性」(『江戸文学』36、2006年))

その際に、歌川国芳が挿絵を描いた全ての合巻を見渡したことで、絵師の業績研究が作品分析および受容の考察に役に立つ事を確認した。

同時に、当時において、浮世絵では武者絵や動物の戯画などで人気を博していた国芳が担当した作品の中に、その頃の合巻挿絵の第一人者だった歌川国貞の影響の大きさを看取することができた。

合巻は市場経済の商品として視覚的に売れる工夫が常になされている。その読者の好みには一つの傾向があって、国芳がどれほど浮世絵で人気があっても、その傾向からはずれたものは、作品化されていないことがわかった。そしてその合巻好みともいえるべきものは、およそ国貞の人気作品の雰囲気準じており、合巻における存在の大きさを再認識させられる結果となった。

このことにより、国貞に関する合巻の挿絵についての基礎研究を、日本文学研究の領域から充実させるべきだと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、文学研究でも絵画研究でも看過

されてきた合巻における浮世絵師の業績に着目し、文・絵の双方から見た総合的な徳川時代合巻史の構築を目指し、その第一歩として初代歌川国貞が関わった合巻の基礎研究を行なった。

国貞を取り上げるのは、周知の通り、彼が天保期(1830年頃)以後、浮世絵の第一人者で江戸の出版において大きな足跡を残していたことによる。

そして彼はほぼ合巻の歴史と共に画業で名を挙げ始め、その挿絵でも質・量・期間ともに第一人者となり、活動時期がおおよそ徳川期合巻の歴史と重なっている。いわば、合巻の歴史そのものと言っても過言ではないからである。

もともと合巻は草双紙研究の中でも、赤本・黒本や黄表紙といった、18世紀までの様式に競べて基礎研究が進んでいない領域である。その意味でも挿絵の第一人者に絞った基礎研究に価値があると考えた。

さらに言えば、申請者はほぼ国貞と活動期を同じくする合巻作者山東京山の基礎研究を終えており、これまでの研究とつぎ合わせることで、絵と文双方から見た合巻研究へと発展させることができる。

そして、こうした基礎研究に基づき、合巻とは何かを明らかにするために、絵と文のあり方に着目して考察することとした。

具体的には、同時代の他ジャンルの作品や、あるいは18世紀までの草双紙(黄表紙など)との比較によって、合巻特有の物語表現方法を明らかにする。

先述の理由から、まずは分析の一歩として、京山が制作に関わった作品を取り上げて考察した。

## 3. 研究の方法

主たる研究方法は以下の通り。

- (1) 『国書総目録』(岩波書店) および国文学研究資料館の電子データベース『古典籍総合目録』に従って、初代歌川国貞が挿絵を描いた合巻のリストを作成した。
- (2) 国貞が描いた合巻と関連資料について、主要図書館所蔵資料の複写をできるかぎり行い、必要に応じて古典籍資料・図書による資料収集を行った。
- (3) 勤務校の慶應義塾大学をはじめ、国立国会図書館、東京都立中央図書館など、国内の主要図書館所蔵資料の書誌調査を行った。海外に関する所蔵にも目を配ったが、合巻についての資料は少なく、必要に応じて浮世絵を中心とした関連資料

料を収集した。

- (4) 書誌調査のデータベース化を行った。調査のとりまとめに関して、これまでの研究では、縦書きでの文章化(箇条書き)にされることが多く、申請者もこれに習ってきたが、よりよい形になるよう模索する。
- (5) 象徴的な合巻作品に絞って分析を行う。具体的には疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』や天保改革直後に発行された『塵塚物語』などで、詳しくは研究成果にゆずる。
- (6) 作品だけでなく、合巻をとりまく周辺の事象に気を配り、新しい事実についてこれを報告する。具体的には、研究成果にゆずる。

#### 4. 研究成果

主たる研究成果は以下の通り。

- (1) 国貞の合巻の業績について、国内の主要図書館の資料の書誌調査、及び資料収集を行ない、書誌調査をもとにデータベースを作成した。  
前述の通りこれまでの書誌調査報告は、一般に文章で示されていたが、比較検討に不向きなため、同一書名の資料の差異が一目でわかるように、表の形でまとめた。
- (2) 合巻の特質を考えるために、文章の側を分析する論文を書いた(「世話物語への挑戦 十九世紀草双紙の文体」雑誌論文)。言文一致論で触れられる事が少ない江戸時代の文章について、文語的・口語的な文章が混在する合巻を取り上げて、江戸時代の小説文章の写実性について論じた。
- (3) 合巻の特質を考えるために、文と絵のありように関する研究を、京山作・三代豊国(初代国貞)画『雛鶴笹湯寿』を題材に行った。  
本作は、疱瘡の見舞いに用いられる呪術的な意味合いから赤のみで印刷された特殊な草双紙「疱瘡絵本」で、その研究史において所在不明で未見として論じられてこなかった資料である。  
まずはその全容を紹介しつつ詳細に分析し、本作が持つ合巻的性質について指摘した。(「疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』考」学会発表、「疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』考」雑誌論文)  
また、本作以前に黄表紙の形で作られてきた疱瘡絵本『軽口咄』・『子宝山』(十

返舎一九作)『子供軽業』『笹湯の寿』(為永春水作)・『桃太郎手柄話』(歌川芳鶴作、これまで未報告の作)との比較を行った(「草双紙における絵と文の役割」学会発表)。

これらの発表・論文によって、黄表紙時代までは絵と文が一図の中で対応するのが常だったが、『雛鶴笹湯寿』に合巻らしく意図的に絵と文がずらしている部分があることの意味、また主人公桃太郎の絵と文による描かれ方を読み解くことで、合巻において絵が文の、文が絵の単なる説明ではなく、絵は絵、文は文の世界がそれぞれにあって、それらが融合することでより豊かな作品世界が生じていることを指摘した。

また本作は、種痘が江戸に広まった年に刊行されており、最後の疱瘡絵本となった。おそらくこのことを制作者側は十分に認知していて、従来の疱瘡絵本の様式を踏まえようとしていた当初の企画と全く違う内容に変更したことを指摘した。結果として、合巻の歴史と共に活動を続けてきた作者と絵師が共に手を携えて疱瘡絵本や草双紙の歴史を振り返る姿勢があり、このことから合巻史における国貞の役割を論じた。

- (4) 京山作・三代豊国(初代国貞)画の合巻『塵塚物語』(全三編)について、当該作と関連作品『台所譚』(京山作・国貞画)、『人心掃溜莊子』(京山作・歌川美丸画)の翻刻をし、注釈をまとめた。  
この作は、うち捨てられた世帯道具が人間世界の関わりを物語るもので、絵巻の時代からある擬人化された器物物の系譜にある。この作品をとりあげた理由は、以下の三つである。  
一つには京山が、自身の滑稽本を元にしたもので、他ジャンルの文体との比較をするのにふさわしい作であること。  
二つにはすでに研究をした『朧月猫草紙』と影響関係が濃い作であること。  
三つに、天保改革直後に制作されたもので、毎年一編ずつ編を重ねるごとに改革の影響がうすらぎ、少しずつ出版統制や自主規制を取り払う姿勢があり、制作者側が本来合巻とはどうあるべきか考えていた姿が明確に出ていること。  
この注釈と関連作品との比較を踏まえて、人の口まねを旨とする滑稽本の文章と異なり、合巻では物語を提示することを旨として書き換えがなされていることを指摘、さらに初編の擬人化された器物による滑稽さのある黄表紙風の作風から三編の人間主体の教訓的人情物語への変化する様子を文と絵それぞれの

表現方法の特徴を踏まえて分析して、天保改革時に望まれた合巻の形を明らかにすると共に、黄表紙時代とは違い物語や人情を描こうとする江戸後期の合巻のあり方を示す発表を行なった(「十九世紀合巻の表現方法 山東京山『塵塚物語』から」学会発表 )。

- (5) 海外の浮世絵研究で注目されている狂歌摺物において、長らく正体不明だった文政後期から天保前期にかけて国貞・英泉・国芳に大量の私家版浮世絵(狂歌摺物)を発注していた江戸廻花也の正体を、国貞が描いた三枚組の狂歌摺物(助六図、ピクトリア・アルパート美術館所蔵など)に言及したとおぼしい山東京山の書簡(鈴木牧之宛)によって、天保期の長州藩主毛利斉元だと指摘し、国貞の合巻で最も人気が高い『修紫田舎源氏』を題材に制作した狂歌摺物(スコットランド国立博物館など)をはじめとする、狂歌師江戸廻花也の狂歌摺物の全容や狂歌師としての事蹟を紹介した(「Ryuotei Edo no Hananari: Daimyo of Choshu Provice and Surimono Patron」学会発表、「The Daimyo as Kabuki Fan and Kyōka Poet:Srimono Commissioned by Edo no Hananari」図書 )。
- また、大名としての足跡や、狂歌師としての評判、さらに山口県文書館に残る斉元の狂歌摺物に関するメモなど、海外の媒体で紹介しきれなかった様々な情報を追加して論文化し(「柳桜亭江戸廻花也(長州藩主毛利斉元)の狂歌摺物 伝記と『斉元公御戯作集』を中心に」論文 )、大名の人物交流の一端を示し江戸時代後期の文化形成のあり方を考察した。
- (6) 研究の成果を講演・パネル展示の形で積極的に一般に紹介した。代表的なものは以下の通り。

講演「江戸の絵本「草双紙」の世界 絵と文で綴る物語」(日吉キャンパス公開講座、慶應義塾大学、2010)

講演「柳桜亭江戸廻花也の正体 大名の狂歌遊び」(役者絵とその周辺、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2008)

講演「江戸の源氏物語 光君の記憶」(日吉キャンパス公開講座、慶應義塾大学、2008)

パネル展示「疱瘡絵本研究 『雛鶴

笹湯寿』と『桃太郎手柄話』をめぐって」(慶應義塾大学日吉キャンパス研究活動報告会、2008)

講演「浮世絵と草双紙」(フランス国立東洋言語文化研究所、2008)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

津田眞弓、「柳桜亭江戸廻花也(長州藩主毛利斉元)の狂歌摺物 伝記と『斉元公御戯作集』を中心に」、『浮世絵芸術』161号、1-19、2009、査読有

津田眞弓、「疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』考」、『国語国文』78巻7号、1-19、2009、査読有

津田眞弓、「世話物語への挑戦 十九世紀草双紙の文体」、『文学』隔月刊8巻6号、45-52、2007、査読無

〔学会発表〕(計5件)

津田眞弓「十九世紀合巻の表現方法 山東京山『塵塚物語』から」、奈良絵本・絵巻国際会議奈良絵本・絵巻国際会議ニューカッスル大会、ニューカッスル大学、2011年2月11日

津田眞弓「十九世紀の草双紙を考える 歌川国貞と歌川国芳を中心に」、奈良絵本・絵巻国際会議神戸大会、甲南大学、2009年8月30日

津田眞弓「草双紙における絵と文の役割」、奈良絵本・絵巻国際会議アルザス大会、コルマル市展示館、2008年9月25日

津田眞弓、「Ryuotei Edo no Hananari: Daimyo of Choshu Provice and Surimono Patron」、Surimono Workshop、リートベルグ博物館、2007年8月21日

津田眞弓、「疱瘡絵本『雛鶴笹湯寿』考」、日本近世文学会春季大会、青山学院大学、2007年6月9日

〔図書〕(計1件)

津田眞弓「The Daimyo as Kabuki Fan and Kyōka Poet:Srimono Commissioned by Edo no Hananari」(John Carpenter 編『Reading Surimono: The Inerplay of Text and Image in Japanese Prints』(Hotei Pub、62-71、2008)

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://web.keio.jp/~edo/kunisada/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

津田 眞弓 (TSUDA MAYUMI )  
慶應義塾大学・経済学部・教授  
研究者番号：4 0 3 9 0 5 8 8